

城内掃討戦五日間、彼我共に多大の損害を出しながら十二月三日払暁、沅江北岸堤防上において敵の降伏をみたのです。

十二月三日夕刻、連隊長・黒瀬大佐は市内の広場に将兵を集め入城式を行いました。

連隊は十二月五日夕、常德城を後にして反転、進撃してきた道を引き返し、一路漢口に向かったのです。

大隊は後衛部隊として敵の追撃を退けつつ反転、援護の大任にあたりました。

連隊本部は葛店に置き、第三大隊は華容鎮地区に駐留し、常德作戦は終わり、次期作戦に備え、着々と戦力の充実を図ったのです。

今でも一番有難く思うのは終始、郷土出身の人々と行動を共にできたことです。

## 常德、衡陽、芷江作戦従軍記

三重県 玉木 齋 吉

昭和十八年十二月三日、多大な損害を受け、激闘の末漸く奪取した常德も、敵大軍が包囲態勢を取る形勢になったので、僅か二日間の占領で直ちに反転を命じられた。上の人は兵隊の命をどう思っているんだと怒りを感じたが、兵隊は上からの命令には反くことは出来ず、北方に退った。

後日、聞かされたことだが反転開始後まもなく大本营から再び常德占領すべしとの命があったが、戦力が極端に衰えた今は、とても無理だということで沙汰止みになったそうである。

歩兵第百三十三連隊第九中隊の定員百五十名が四、五十名に減ってしまったほどの激戦であった。

沙市を経て漢口に入ったら在留邦人が日の丸で迎えてくれて嬉しかった。私は常德戦で右腕貫通銃創を受

け野戦病院に入院中だったが、たまたま患者が泌尿器科ばかりだったので、院長から戦傷第一号だから威張っておれと言われ、お陰で上級者から食事洗濯の世話をして貰い助かった。

十九年正月過ぎ、中隊から次の作戦が始まるのだが、「皆死んでしまつて古い兵隊がおらん、玉木悪いが銃が持てるようになったら一日も早く帰つてくれんか」と迎えがきた。部隊は葛店という処に四ヵ月駐留して兵員、資材の補充に努めていた。私が帰つた時は連隊創立以来の戦力が充実にいた。

十九年四月中旬、待ちに待つた衡陽作戦が始まつた。敵を欺くため重慶を攻めると見せかける大迂回作戦をとつた。五百キロもの大行軍の末、岳州に出て汨水の渡河戦では、対岸は軍官学校の生徒が守る堅陣で、猛烈な火力を集中してくる。その中を夜に乗じて強行突破したが、味方は大隊長以下六十名の損害を受けた。時に五月三十一日。

さらに前進して湘潭に入る。水飴がたっぷり給与になり水筒に入れて久し振りの甘味に酔つた。衡陽駅ま

では順調に進んだが逐次在支米空軍の来襲が多くなり、加えて地雷原が至る処にあり損害も増えてきた。

九中隊はP51の落下傘爆弾や機銃掃射にやられた患者の担架輸送に任じたので、衡陽郊外に着いた時はクロ高地は弾薬不足のため攻撃中止になっていた。

敵陣は縦深陣地で次から次へと陣地が重なり一つ奪つても周りの陣地から猛射を浴びせられる始末で犠牲が出るばかり、加えて制空権は敵が優勢で日の丸機は滅多に見られない状態だった。敵陣の前は崖になっていてその前は丸太の先を尖らした鹿砦と交通壕が走り鉄條網が張り巡らしてある堅固なものだ。手榴弾を一晩中ドンドン投げつけていて近寄れない。

七月十四日、第二大隊が(23)高地を攻めたが激戦・苦闘のため、我が第三大隊に援護攻撃の命が下り、第九中隊は迫撃砲、チエッコ機銃の猛射の中を匍匐前進で肉薄、頑丈な鹿砦を突破してミカン山といわれた(23)高地を遂に占領したが中隊は四十名足らずとなつてしまった。

翌々十六日、(34)高地を攻撃することになり全員

背囊を外して軽装になったが、並べられた背囊を見て「一体、幾人がこの背囊を取りに戻れるだろうか」と悲壮な思いがしたことを憶い出す。小さな握り飯二つが支給されたが見る間に蠅が真っ黒にたかり白い飯が見えなくなった。周りは死体だらけだから蠅が飛び廻っていた。

第九中隊はこの作戦遂行に当り決死隊を編成することになり、第一小隊鈴木分隊が第一決死隊、第二小隊玉木（兵長）分隊が第二決死隊となり、鹿砦爆破用の弾薬を背負い十七日の黎明を待って大隊長と水盃を交わして行動を開始した。

鈴木第一決死隊が先発となり手榴弾、チエッコの猛射の中を手探りで匍匐前進、鹿砦に肉薄、弾薬を取り付け点火しようとするが、敵の手榴弾の炸裂がはげしくてなかなか点火できず、そのうち負傷者も出て苦戦の末やっと点火に成功。「玉木、今だ！ゆけ！」西口大隊長代理自らの叱咤の前進命令。私は第二決死隊全員と共に、(34)高地中央の機関銃座目がけて突撃を敢行した。

擲弾筒の援護射撃はあったが他の重火器の援護はなく、遂に肉弾戦となり、チエッコ銃座を占領。続いて中隊全員(34)高地突入に成功したが、中隊で十名戦死、私も右大腿部に手榴弾破片創を受け野戦病院に収容された。三度目の負傷である。

入院はしたが一週間たっても手当は一切なし。食事も動ける者は勝手に、そこら辺を探して喰えという調子。とてもたまらない。中隊の方がよっぽど良いやと逃げ出して中隊に復帰したら、指揮班に人事係が一人いるだけ、他の者は(56)陣地攻撃に出ているからお前はここに残っていると云われた。

十四日から始まった第二次総攻撃は三、四、五次の総攻撃と続き、八月七日夕遂に敵降伏の白旗が上がり衡陽攻撃は終わった。連隊は各大隊長が戦死して交代すること三回に及ぶという大損害を受けた。中、小隊長は全滅、四二七名の戦死者を出した。捕虜の監視を命ぜられたが僅か七名では数千人の見張りは手に負えない。仕方なく高台に機銃を据えて逃げる者は逃げるままにして、時たま警告の発射を命じた。間もなく中

隊復帰の命が来たので引揚げたが、あの多勢の捕虜はどうなったろうか。敵の重傷者は衛生兵が手当していた。

我が方の損害も大きく、元氣な者は第九中隊で僅か十七名、第十中隊では上等兵が中隊長代理をしていた。第十一中隊は十名しかいなかった。

食糧が無いので市内に入ったら大きな「かめ」に真っ赤な血が浮かんだ漬物が幾つもあった。豚の血と野菜の漬物だった。

衡陽陥落後、補充隊が到着したが三十四、五歳から四十歳ぐらいの第二国民兵の老兵で、銃は三八式が五人に一挺、それも手入れ用の窄杖無しのお粗末な代物。牛蒡剣は鞘が竹、水筒も竹の筒だったのには吃驚、この戦争の前途が心配になった。

十月末には宝慶近くの黒田舗に進出、間もなく第二次補充が来た。今度は立派な兵隊だ。召集の予備役の兵長、上等兵ばかりだった。全滅状態の中隊も息を吹き返したように次期作戦に備えて猛訓練が開始された。

二十年四月芷江作戦が始まった。相手は米式装備の正規軍と在支米空軍だけに手強い。西口大尉が第三大隊長となった。入隊当時の中隊長だっただけに良き大隊長の下に働けると思った。朝から一日中、敵機が二機ずつ上空を哨戒している。芷江飛行場が百キロ以内にあるのだから制空権は常に敵の手にあった。

四月十五日、宝慶を出発した連隊は二十二日山門の峻険で、その上懐が深い山の中に入ってしまった。地囃も粗末で全く当てにならない。敵状もよく判らない。

こんな作戦をよくも始めたものだと思った。部下には「他言を禁ずるが、家族の待っている故国へ無事帰ることを第一にせよ、俺の言う通りにすれば死ぬことはない」と教えた。作戦中に内地の飛行機の原料にするからと「アンチモニー」という重い金属の塊を持たせられたが戦闘が烈しくなるにつれ、いつしか捨てられた。芷江を守る敵の前線陣地青岩は裸山でトーチカ群で固められ、攻撃は困難を極めた。

我が第二小隊は尖兵となり青岩の二つあるコブ山の

一つを攻めることになった。私は「玉木一人でトーチカをやりますから」と言つて手榴弾を持つて匍匐で二時間かけて頂上のトーチカに近づき、銃眼から手榴弾を放り込んだ。ダーン爆発と同時に小隊が上がつてきた。「中隊に連絡とれ」と叫んだ。間もなく指揮班長の堀本軍曹が「玉木ヨカッタナァ」と言つて帰つていったが、その途中敵味方入り交じつての混戦の中で行方不明になり皆で探した。血刀が見つかったが遂にそのままになった。

もう一つのコブ山は第十中隊が占領したが夜に入ると敵の逆襲を受け山を取り巻く炎の輪が鉢巻きのようだ。これは手榴弾の閃光と草が燃える火だった。麓から頂上に燃え上がつて、終わりには山全体が真っ赤な炎に包まれ、手榴弾の爆発音と炎が暗夜に映えて凄絶だった。第十中隊は全滅かと心配した。生き残つた者から「明日は第九中隊だゾ、覚悟しておけ」とおどかさされてますます守備を固めた。

先ず昼間のうちに軽機の射手に敵が上がつてきそうな地点をよく覚えさせ、夜でもそこを射てるよう訓練

をしておいた。

果たして五月五日の夜、敵の大夜襲が始まり接近戦になり、手榴弾の投げ合いになった。敵の弾を投げ返すと敵もすぐ投げてくる。それを拾つて投げたら、なんと味方の弾だった。日本の手榴弾は火を吹いて飛んでゆくが敵の柄付きのやつは火を吹かないので、どこに落ちたか分からないので始末が悪い。思わぬところで爆発してやられる。そのうち手榴弾が尽きたので「弾薬呉れッ」と叫ぶが全く返答なし。仕方なく戦死者の弾を集めて投げた。その時近くでダーンと爆音と爆風が私を襲つた。危ないッと銃を盾に伏せたが耳が「ガーン」と鳴り脚が動かなくなった。「やられた！」応急手当の上、小隊の指揮を続けた。

敵は近くまで攻めてくるがそれ以上は突っ込んでこない。必死の応戦に敵は後退していった。この戦闘で中隊長以下十七名が戦死した。私の耳は鼓膜が無くなつていた。(二十一年七月復員後、町の医者にかかった際、「あんたの鼓膜無くなつてるがどうしたんじゃ」と言われて判つた。)

敵は空から飛行機で補給するし、トラックは夜間堂々と灯火をつけて走って来る始末に物量の差を見せつけられた。我が方の輜重隊は、昼間かくれている林をドラム缶爆弾で焼き払われ、逃げる処を機銃掃射と爆弾でやられ、補給物資は全滅の状況だったので、連隊本部までは補給が届いても前線までは届かなかつた。機関銃の兵隊が馴れぬ手榴弾を投げようとして後に落したのが坂を転がり落ちて爆発し、味方の兵が負傷した例もあつた。

作戦中に無線で台湾沖海戦で敵空母多数撃沈の報が入り万歳を叫んだこともあつた。私は歩けないので馬にくくりつけられ宝慶まで後退したが、途中の路が戦車壕が掘られていて真つ直歩けず、苦勞の末野戦病院に入り手術するのを断っていたらそのうちに治ってしまった。

耳の方は現認証明する上官がないため、五十年近くたった現在でも傷痕軍人になっていない。負傷すること四度びである。

## 正江作戦従軍記

青森県 大柳 弘

私は昭和十六年に一度召集され、十九年六月、再度の召集により弘前の三十一連隊に入った。父は既に亡く、新婚間もない妻と母の二人が残されたが、家は農業をやっていたので衣食住の心配はなかつた。

入隊後、直ちに編成された四十七師団(彈部隊)は当時苦闘を続けたニューギニアの援軍用として作られた部隊で、強力な装備を持った大本営直轄の師団だった。私は百三十一連隊第三大隊第十一中隊に編入され、八戸海岸で連日逆上陸と斬り込み訓練、タコ壺掘りに明け暮れた。

それが船不足で南へ行けなくなり支那派遣に変わり、正江作戦発起の時期に合わせ、十九年十一月中旬、八戸市鮫駅を出発、貨車輸送で一路漢口武昌を目指した。